

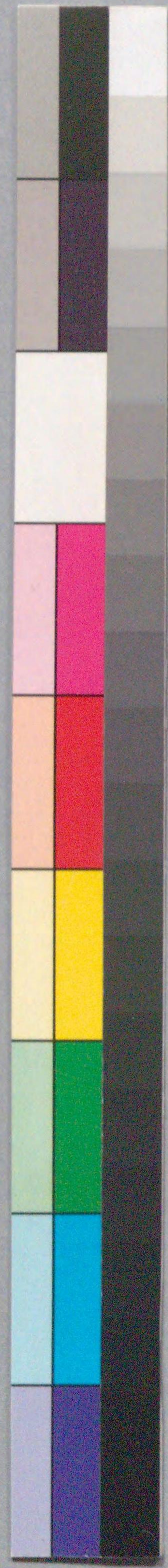
眠獅選

上

208
126

国立国会図書館 眠獅選 2巻 208-126

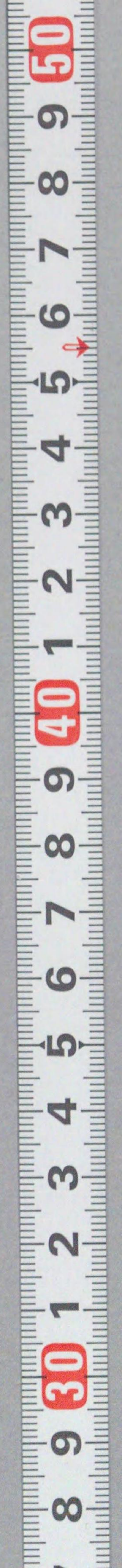
ガラス使用



叙
 籠と仕午忠切く鳥好子の生を
 不とてあひくく我聞ゆき
 獅を狂獸くく席物成合らす
 甘やきしし不忠を和して身の
 自由をなせり人眠り師依渡り
 不他の傳ふ云狐と出る小人



叙



犬の恐きあつては
其の事しをなす
あそびあそび
あふどそ
一睡
あつて
五十一
極
とそ

安日

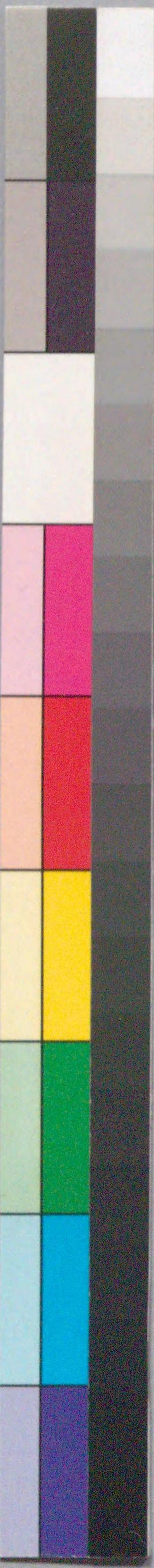
ゆ

あ

あ

あ

民





眠獅選卷之上

八丈舎有笑著

或人弓射る事を習ふまゝとて矢放たをさそふ師の
 初人の人さし川の矢をりりりなをれ後のこのそて始れ矢
 等用のゆあり毎度只得矢なくけ一矢不定人と云と云
 以れふ二の矢師の箭まひとをあらふせんともらんや懈
 怠の心も何ぞ志くばるとも師の言を知らしめりしめ
 業のふらふとて一と兼好法師の言をみまの心おふ
 分の志ありみら者おごとも安得ぬ一今の役者れ到ふ
 まつて役の教く矢とる時をひとを控くむとて大
 ふとまば一日を足飽る教毎又大ふ小すまば廿一日ふ

眠獅選卷之上

昔一歳ありて健とよしと人やむしと今と云ふはさうの
わたりか又あふに眠床の凶を志すや志すは傷に化振ひを
習はれども有ぬ一季特のわたり時代と世話序服を
こりり取を及ぶものもあらずし甘中ふ立役実悪事歌
老女叔仁方ある形且女形の家層ふ出く安永との年数
九二十四色の生立なれば及ぶとよし部も廿四の
功小應く立役とをりてのまふ善事成引くそ其位を
して書かざるも若くは信ふ合休して今大至極上吉
の事かん成なる事成知るべし

○立役之部

極上上吉

春後波舟志事

後まの海

幾度出ても正月の場の情のままりよく立役は傍の極る
をひくけ役をま書頭と守

至極上吉

竹中官ま書

狭間合我

狂言と海との元合より軍師の丈夫の傍より出く
無事と愁ひの元變り古今けとや有べくとも

大上上吉

鷲坂方肉

悪女房

捌役のつらぬしとそを素麗うて情深く

至上上吉

福急屋法ま書

八重くま





此條より... 可部
子侍りの様く... 男奉の然の付...

大上上吉	武藏坊安慶	堀川夜討
大上上吉	赤坂右衛門	大塔文
至上上吉	放駒長吉	双蝶
上上吉	濡髪五右衛門	雙蝶
上上吉	於比宗三郎	末切み
上上吉	安部貞任	安達系
上上吉	天川至義平	忠長系
上上吉	毛谷村六助	真形記

上上吉	小登道風	青柳祝
上上吉	鬼一法眼	三畧巻
上上吉	菅丞相	娘系
上上吉	大黒由良	右長系
上上吉	和久内	固性爺
上上吉	安倍保名	あしや
上上吉	千羽川吉之	千五藏
上上吉	常陸守	ろくろ川
上上吉	唐本政	伊賀之

民師選卷之上

三

○變惡之部

大至極上吉

藤原時平

菜種歩供

極上上吉

石川五右衛門

釜ヶ門

大上上吉

石川五右衛門

釜ヶ門

上上吉

石川五右衛門

狭門合戦

上上吉

かぢや壺九郎

新うすゆき

上上吉

李五丸

すがをろ

上上吉

や川之伴助

鍋やけり

上上吉

中浦大膳

播広巡

○敵役之部

極上上吉

高師直

赤穂塩竈

上上吉

梶原平次

初うき

上上吉

梶長之助

し

上上吉

稀

すがをろ

上上吉

ひぬりの八兵衛

若女房

上上吉

ぶくまん庄之清

出入のまなく

上上吉

石川悪右衛門

あし

上上吉

芥子定九郎

若良翁

○屋形之部

極上上吉

一條大將

鬼市



上上吉

物々之左郎

十帖源氏

○花車形之部

大上上吉

覺

夢

菜種湯供

大上上吉

岩

手

安達ヶ原

上上吉

み

め

近江源氏

上上吉

笑

上夢

菱ヶ原

上上吉

山

姥

岩ヶ原

極上上吉

岩

ふぢ

岩ヶ原

○親仁形之部

上上吉

鉢屋孫左衛門

千本さくら

上上吉

竹村定之進

戀女房

○若糸形之部

大上上吉

大星力孫

赤穂地蔵

上上吉

捲多丸

兎ヶ原

大上上吉

鬼多丸

鬼ヶ原

○子役之部

上上吉

怪童丸

姫山姥

○多女形之部

大上上吉

板願女

和田合戦

上上吉

同洲角多女房
おくら

巖柳島

眠獅選 卷之二

〇九



上上吉

たそく進馬形

老 獲 多

上上吉

繁糸の井

老 女 房

上上吉

さくさく小女房

けいさく佳馬

此形は女形の多かりし小使より一級改よ
記守九虎人の見おの改法より又役のそれ
と成る小出のさくさくともあそころまらやまの
備を強きともあらんや

夫は表裏はちどめより眼の定まる正月の場ありび
うり近しけれどもおつげ大安も境も改手評
よくありしとも只正月の場程よくあつたを

あふなり○狭間合戦八束たそく○毎夜を三束他○友を誘
○五右衛門四役後束他役の役片岡仁左衛門へ懐けて二役を勤
めり又大坂まで八毎夜を三束他との三役を勤める
各其役の糸持よくあつたのみくしきも入るごとくいへ
ど行中へお返し役をき程小勤むるものあふ仕人なり

或人同く日系たそく○大津の役嵐束芝大坂まで芝次
巴おそろ束芝おしよもあつたといへを巴おろくを
を合すともいへ見お一統束芝たそく又入るごとく
あつんとぞおへ下地よきお人有りてあつたと甲斐
なくもあつんぬ眠着てえ八高村束芝程の老を喜



眠獅選巻之二
 あれは狂言のくもあれどもいろは女形より勤る
 時小應下てよくせり相争ふなりてハ役ハ末芝ハ計
 畧小落し兼ぬありのいろはの計畧ハ掛りやこも
 あまハ歎たれど時の事をさハ百倍よりそ向ふのそ
 ろくそへそやうそへひとぞ

めらば身もともをうてハ本政をハ由男當り狂言
 こそまふ出れもあつねども狂言二度出り時眠獅ハ役と勤
 志ハ故障あつて幼日の夜より驚く引け飯小中山化狂言
 法とある大俳優ありまも師の流義を承り尺付さ仕り
 大俳優をせしむ九十四五日もありたん眠獅よりも能く
 とぞ汝汝其の程よく再勤有てい役をつとむふ中山一流と
 用ひば後の傳授もあつり一とそ其風儀と傍の別なり
 由男小落し兼ぬあつねども狂言二度出り時眠獅ハ役と勤
 部の殿小落し兼ぬあつねども狂言二度出り時眠獅ハ役と勤

一眠獅親父ハ昔ふとある通り嵐小六のみといふ小六のその昔昔は
 小六といひ小六の時より徳芝居をそ名をとる後ハ
 可成仕歩ともいれて享保十二未五朔月系戎屋名代芝居
 まで別師道後小新平といひ二代目嵐三右衛門後見と
 なりて危本を流とあしが初巻巻より終りまで元文四
 年より上上吉吉となりて二ヶ條まで名の跡を狂言と

三程最極上吉とありて山姥坐の井岩手女非人とを
のお才土手のたるまは辰次郎右衛門女房おま金目此程
勝利生民谷野丸女房お町是等の程とておの役共の所
ぶつてんりもなまぬ仕手とてうふ他りまをくく石橋
なまの事とて通五十多の風儀とてやどとをまて
方がくくて幾細工とて叶とて字を紋小彫りありり
叶の丸を致付まうしが寛曆十四年より角小の字と座り
明和六年丑未月大坂中八百花座とて嵐二右衛門と名乗
る役とて六法を教えせ小法とて其座のまより体と座るが
安永四年未十月より京流とて子息雛助元後の子と

とて一世一代の山姥役を勤め別名多逸風と勤る色
は幸丸の雛助勤く大入をとて其座大坂より豊彦秋
大坂とてその名のありて其座山姥を勤り其法とてめとて
も引く其後雛助は敏原昌子とて隠居くとてその名を
法名号心と自ら唱へ毎度物法のとてその名をせりも
老が尻かりて天明六丙午年七月廿二日を圍の書と成
しとて其座勤めし事四十一自行年七十七年
一眠獅父母の孝公ゆくとて付居あり三十四五元同座勤
寛曆十二未多中山由男活藝とて命勤めし時一産有て
その時似味あづまの役を勤めし時三十四年取小六系於り

眠獅選卷之上



く勅めしをうてさあは彼叶と云字苗字は改門人者
苗字をふるるといふは其礼嚴希也爰に記す

関 三十席

嵐 小 六

柴崎 林左衛門

嵐 源之助

嵐 新平

嵐 栄次郎

嵐 新助

嵐 権三郎

片岡 仁左衛門

中村 伸 彦

名付て百萬と云

は伸彦の元中村岩彦は傍くといふも中村苗字
御子付て眠獅門家と云るも奥又云

一中村十翁二代目元公系を振附て之と号れ

小倉山百枚と云人の子も小倉山千石席といひて寛延の始

りり出く京原松七三席を名を悪松忠吉となりしと云

は清く宝曆十辰より実父小倉を中村吉右衛門の子

と成り中村十翁と改改り江戸より居て又大坂と云と云





評よくゆきしとて於此法よくも有し江左は中絶を
色やあしし法もあつり大坂をうつとあ天明六年申の
夏比不号病ひ付て弱うあつり未穂塩竈の中良は
役を勤路うと病臥自分覺未なくも有しと眠獅
を病癒ふ振さよせと師父と家名我えと親むしを親
是廿二日六月十日路うととりぬ眠獅を交と門人の
肉とて其名を續さん事をなとと一皮ふ及ぶといふ
事なとてくこと一一周忌ま及ぶといふとも相續
なとぬり係のとりとよ中とのひて授なくしてそ時子
及びく叶秀と改名とせと小祥を吊あつりてり

廿二子中村の苗字哉高胎三代目中村十花秀と
ふと花を能る今十花秀と名なるを以て眠獅是哉と
り

- 中村岩花
- 中村竹花
- 中村四郎八
- 中村吉三郎
- 中村初花
- 中村市花
- 中村市吉

中村大三郎
今川吉三郎

時不眠獅而化事小扇の身を習ひぬんを勵とるふ
るをををせり依て其中より七並男子又男子なる
事の恥辱を也ちがく過り有りたえ我一と並男子ふなるの
流りも都多此一流は興は素人の門人となる氣と又
之加へぬ教

大坂之部

海濱屋幸八

京都之部

大寺川屋々之儀

系扇屋信孫
あけや屋は春
山々々々其野
ふと屋柔八
信々や権八
日野屋志也
とせ屋又八
大和屋市松
名田屋昌間
大黒屋八重

妙々や口々
系林屋多川
素名屋琴井
妙々や友々
万 幸
素名屋小太
素名屋九々
富田屋卯の
妙々や口々
系林屋多川

さくやとせ
樓广屋忠義
さくやとせ
いしやとせ
壺中館業樂
山もや小舟
いしやとせ
あび屋今丸
松屋中東義
いしやとせ

内田金いま
八百金多々大
内田金志堂
本所金み糸
業名金兼代
大木川や小舟
松幸一おと小
富田金来義
西村金多如の
西村金あさ

富田金序吉
あしやとせ
あけやいし
すたあやゆ
けりや小北
系之助金小傳
阿州中やとせ
あびすやとせ
世格人
洲濱金幸八

業名金九近
八百金幾平
伊勢方定右馬
橋野良助
幸一尾丸
系之助金忠八
大津金定吉
大津金多吉
系之助金大八
大津金演吉

同
大坂惣門子頼リ
近 玄 彰

鳥羽左友 八
鳥羽左郊 八

世居人
伊勢 定之助
同 鳥羽左郊 八
京惣門子頼リ
富田 左之助 四郎

は人初まの甚よろい其本妻後而ふ名をうけて女形の内ふ
後と不他を出し石橋をもつとめとれども立役ふ
なりと能あやうび不他以はさむ其申小扇のふふ
妙を得くやうしくと自中をあらぬみふ

のごとく素人の門せんあまーととるべし

一去年寛政元己酉の九月九月より浪海の二世一代と
しく角のなうて不他を出し不般景昌をうて廿九日
まで勤め次ふ中のなうて敵又せの助しく澤村
其善振と下して十日十日の大切は不他くあて
敵又せ相ををれ交く大ふ目め成悦をせ十二月
三日までの大入り目あふ及ふ秋をうて其は角

角の芝居中山福をなうて

大切 やまぶし 山伏 摂待 忠臣 旗揃
系事



大切り 化務六教仙 大坂中の芝居 所化支 浅尾孫右座

康秀 哀はくー 三つり

熟れ有暇月をよませこそぞ老と月をいひせり
 官女山下金作
 是中なる花女をいふ茶世は世に情ありとこそ
 吾妻屋
 代そのの月見が首見へあてあつくと其世は
 市太次郎
 数死念仏いとせり中を無かり生をいと
 浅尾孫右座
 世に世を思はずは世に世を思はずは世に世を
 山嵐之助
 世に世を思はずは世に世を思はずは世に世を
 坂東岩五郎

業平 小町 所化事 本せうー
 深田将中村京十郎
 梓弓の末裁ひるこそまの世に世に世に世に
 市川八百蔵
 世に世を思はずは世に世を思はずは世に世を
 三将五郎
 世に世を思はずは世に世を思はずは世に世を
 関三十郎
 世に世を思はずは世に世を思はずは世に世を
 姉川四郎

世に世を思はずは世に世を思はずは世に世を
 住丁 叶雛屋
 世に世を思はずは世に世を思はずは世に世を
 山村俊之

眠獅選卷之二



○亦他より次牙

其善を小町として初め亦仕丁となりて其を習て口役
とて居る人其後合て後五役の早終り

始胎代 僧正遍昭 二世活 丈原康秀 三胎代 在系業平

四世活 毒撰法師 五胎代 大伴良直 此處より末は実無

の役あり亦他よりして亦他亦あり其を以て其持のつり
めは奴を彫りて執中委々の亦他より亦肝を法と
せり亦凡亦他より評する時と

牙一 業平 雲上 牙二 毒撰 兼和

其のつりめを評してその時と

牙一 毒撰 其衣の徒と 牙二 康秀 其をいゆれ

其持のつりを論ずる時と

牙一 康秀 老の急死 牙二 業平 持弓のあとをいふ

引ぞつりてをりたる凡は法より其の傍の強務と
思ふ其威有りて強と偽者の強ひるを強と云ふ
いふなり一次に論ずるハ始より出ゆる山伏持弓と

眠獅選卷之上

佐後の老母役初め静山翁江田源亮夫婦と妙く其翁
藉うも其翁をわたりはく妻不顔抄のおとやうと
は役ハ先年系故そてお小六此危公の役をつとめ姫と
成る顔抄をうを勤めしとぞ穿るる功をつとてや
志とやうとも又同一癖の身と膝のなごうた既の切
あんだいのそとをらんせとくおとろ子凡お化すとの
るものハ後お花やのそるるお翁をそ居並び留小六小
の鼓よりを鼓三味線胡弓張強達たどふお翁をそ
並べましく拍子を合すとまおな於子ハ一世二代の
二夜の丸曲よそ少法をく漸く業平の石匠お翁本

万里が夢の出語りのお情をそ三弦と二人のそ其翁
ハ翁の二ふし一ふおおありやとのそ其翁を極待より
旗持ふるお翁をそお方更ふし一も床方の一曲お翁
そとそどうもとそ翁方をそ人もあつた計ひをまて
貝圓の森おと自然の傍へそ身見れそそ翁
殊小六代事お翁のほおれハ他おなくもお翁をそ
は二役ハ極別お翁をそ思へと其翁お守とそ又
彼素人弟子お翁のそ翁はひも有へられお翁の
お他を又翁をそ書お翁

其二次第

民部卿

眠獅選卷之上





甘言もみ小狐釣りの不化又曰上月、堀江市に例芝居を勤
手練 及仍委れおるべき

寛政元酉七月末四条芝居にて侍を傷来芝居を傷眠勤
勇勢 関帝玉並像

天明九酉正月大坂中の芝居二の終り小勤
之身 花道こまの石橋

明和五子九月能川兼三と並長官として及魂香ねる
又平女房とまゝ山の役大切とせ成はと心

石橋を元早川初瀬といひ一女飛とら舞業まじまゝ獅子の
戯たはまをなせりらん能し鶴しとく其後享保十七年

江戸様よりなると元祖能川兼三と並工夫して不化と
なり石橋とぞ是事な後と出して巻れを得る中村
百十房は成習ひて能川依中村を継ぎの語をせ
つゝある度ある事なると能助も父の流業を
是成はと心とせどもやあらはしとく又一流
ありしとぞ其息子なるは能助も父の流業を
承すそ時ハ心とせ二十六七歳能助りたると元
不化事ハ依後高七五房分りては長五房ハ
元祖依後高坊より獲て傳へるといふ後者れ子とて不化子
とて元ハ長女なりとて娘を能助も承す七小町

民師選卷之二

眠獅選

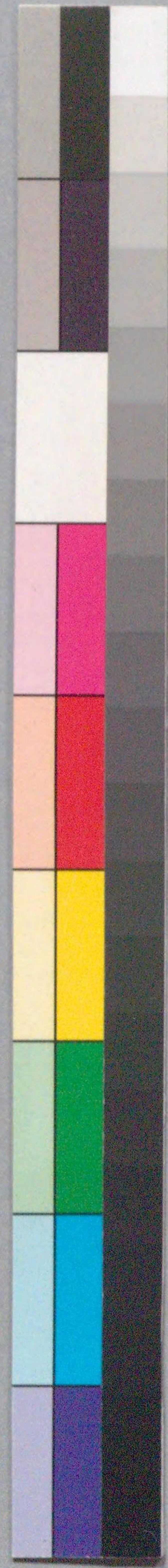
下

眠獅選卷之六下

或ハ邯鄲かんぜんの四季おととく有り廿四時にじゅうよんじの時をつ
とむるもととそ是等より六歌仙も二丈の所ところに
その歌今の澤村困くまを居も何ト長五ながごの男子そ
常少中じょうしゅうちゆうよりして此度一考一代のワキをつとむ眠獅
をこすとして小町一役もくあつらふり又あふ
たうぞそえて修しゆ又おと解とくして仕方の存ぞんを
して汝なんはよくそ自由じゆうにあらはるる役者も
あつらふるとも亦また他事たじ其録しよくまゝと有る也
つども大田おほの若わかくも出でる而已のみ
眠獅選卷之上終

眠獅選卷之六下

〇十ノ



大坂中村十條
庵子と妻子女
の石橋の邊

宝曆二

江戶の梅幸
元徳の邊

大坂(在代三
二夜目本)

岩屋(在代三
二の初り小島)

宝曆三

平乃抄(在代三
定助座)

宝曆四

由良(在代三
定必座キニ)

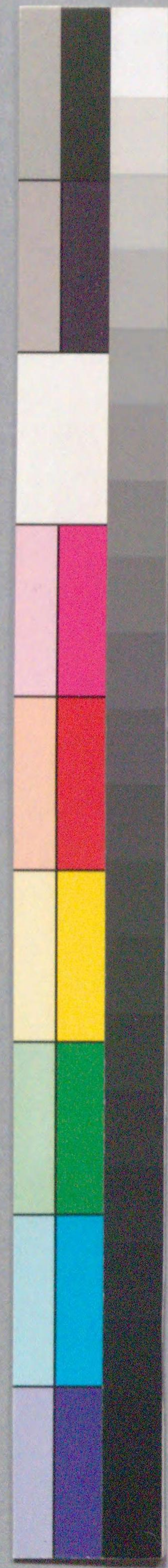
眠獅選卷之下

八丈舎自笑著

折嵐はあまふきやるとく嵐三右衛門二代目
形平より續とゞども左有りて近世叶うぞ
改める雛助之 **宝曆** 元末(在代三)月大坂
よて三折大五郎座(十一歳)よて出初(在代三)
臺之 **●** 叙えせ八木本賣の正化(在代三)
ちの初初意臺より只そのなを(在代三)初
ら(在代三)聖申年別金昆羅馬利生の(在代三)有
才梅雲とぞ勅甘冬(在代三)の勅と叙えせ
後(在代三)よて大(在代三)評よく **●** 聖(在代三)日三(在代三)る冬も(在代三)

眠獅選卷之下

〇一





宝曆三酉
 松高茂平次
 大坂へ出ル
 松本幸四郎
 園子亭上成
 宝曆四戌
 二代目芳沢忠経
 嵐形平終
 〇松多 山本京房
 〇千喜 嵐小六
 〇乃波 末代房
 〇乃の系小六
 末代大内りせ
 花巻城のさへ
 宝曆六子
 取高屋高助孫
 中村仲茂立派成
 洲川系次郎孫

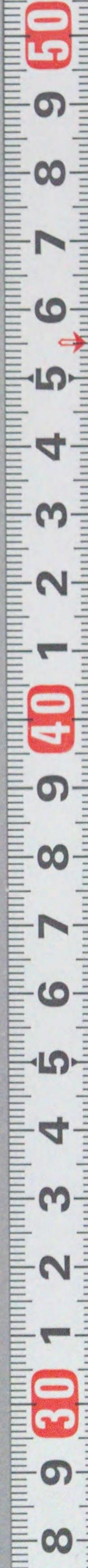
見方立
 〇乃波 末代房
 〇千喜 嵐小六
 〇松多 山本京房
 〇乃の系小六
 末代大内りせ
 花巻城のさへ
 宝曆六子
 取高屋高助孫
 中村仲茂立派成
 洲川系次郎孫

角の座二の替り
 天竺徒
 宝曆六毛
 大倉廣治 終
 若岡大吉 終
 宝曆九卯
 山下又孝房
 芳沢勝太郎
 江戸大坂へ出ル
 角二の返り
 三十三大内
 竹田五市
 巻あつて西
 二年

〇乃波 末代房
 〇千喜 嵐小六
 〇松多 山本京房
 〇乃の系小六
 末代大内りせ
 花巻城のさへ
 宝曆六子
 取高屋高助孫
 中村仲茂立派成
 洲川系次郎孫

民市選巻下

の上



眠獅選卷之二

いよふ木上吉
○山姥 小六
○峯九 平九

お後を申し出せ有りしなり二の祭りけい
せの花鳥を催袖服を女形日士の流仕合
なぐり信を崩さぬ仕おと琴々九三の祭りハ
津國宮垣を清水納々と娘の白桑の二役

角の座二の祭り
二十石の座
中村十郎
まきつと改め

ともいほよく ●日九知冬より日京於例まで
を中と勤て二の祭り通神廓を我より五席
晴宗と大後之虎の役いよ目高川を清姫の役
●日十辰冬より五席あり西の天坂より姉川形
四席あり西の物系敷せハ浦大助義隆娘玉琴
より勤出の役その仕打先は坊より奴系平を朝茶

宝曆十辰
中村富十郎
市川外郎
大坂へ上
角 薩が岬の坊

宝曆十巳
辰川平九郎終
角二の祭り
天狗宴
市村龜寛大坂上
又京必平也莫ヲ
ワト大ハヲ

とこよりての急仕つけ後海をのこして六カ小
なりよりりの交附文よく高敷又せ古辰川
逸流引ましはよく及て翌二月一夜付狂云
よて種々唱今朝唱の狂きよそ蕨子といろは古
初の辰川八義形助の役よそ中出立大狂判を
とり二の祭りハ八文字を其の意実化してハ助八妹と
なりて原夫勤役より後次高島惚る仕おあつ
ふつよのこたぬ法 ●日十二年の二の祭りより
▲上上土とかりて秋葉権現狂言おげせい花月
の役次は後高橋堀川夜必志の役は清き

宝曆十午
中二の祭り
秋葉権現
角二の祭り
いろは初列
山下又ち終
今村七三終
池松七三終
中村助多終
岩田漆松終

民師選卷之下

〇三



佐野川市松路

取小六末出
角八

○七女 文七
○七女 八房
○おせき 坊主
○おせき 南与

中元
大女 八房
の助

○七女 二五房
○相比奈 七五房

宝曆十申
小佐川常世終

○主計 小六
○主計 七女

山本高房終

坂東三八段系

文七座るの拍
息女房狂言
故縁有て休

明和二酉
松本七郎
岸井忠房改

眠獅選者三

清去りてこら娘役おきとも小見おを隠し
けり●同十二末冬八娘て親子別きていへ角の元
文七座る住くるの拍双蝶ふはけのあぶま役
次は菱系傳授そ八梅五九女房おま●同十四申冬
中よ二柝大女房元小六ありまの同元まき款
又せ八扇登小秋の役そ後敷盛成仕おより
るの拍極彩色そ娘おたの役大切おまの
亦仕事お不こ人形中村久米お房との目移り
勤めもとと不評まきこり肩の者おまの
元は清け秋大友まきまきそ助八兼道の二役

と小六よりけ時より大まき者のあつてあると
何判●明和二酉冬同二柝元まき▲上上書とあり
元とせ八乙娘そまきとのまき不迷ひ終まき
坊り兼る風情二役そまきとまきそ純友
色あへ入込切もまきとまきとの拍おまきおまき
の大あり小こりまきとまきとの役おまきおまき
とも小六よ何判よりて▲上上書とあり次夏系
座る清女房おまき秋蘭奢待小娘のおまき
婿奴おまき●同三申大女房相座おまき
後父重忠女房おまき成奴み久平をまき

民師選卷之下

〇四



眠獅選卷之二

身代り小せんとをうりありし教をなまむ見
 景清なる心算も後白狐通を得ての爲合
 示化ぬとてし仕打よう ▲上上士回とをうるれお
 相馬ち房もそ八女丸後みそめい孫娘と勢うての入
 組次も本朝廿四孝小八重娘とて可成とひら
 とさゆはもよく増りつゝ次小蛭小島もそ誰袖役
 こそ相撲の行目ハも焼一そふよとて悦むせ
 ●あまの勢りより角の能く井村身ち忠の能本
 多りそ夫小付とて通討之圃一小る我時系
 後小大八を悦むせての事あまの八娘

文七兼八をく
 四月小出く
 比冬京行

〇乃後方方書
 〇保名三五布

おい一の号話りゆ次小戸を道満小るの案
 の二役あつれ出り ●日四亥之角の能りて
 座本親又そ大坂 在所由来とて娘おひを西三
 妻二の勢りまこ龜庵丁ゆれども二日身り有
 て直お体と續てゆくあまあま基義記出てこし
 正と千名の役多るの種此ゆはよくは思長
 備譯あくとち房女房あくとち忠忠女房
 太徳の二役大伴次は逸風七田忌とて友あり
 ちりもせり法多房女房あとの殿二友目
 ぶあの前白と増して ●日五子の事より尾張

〇松多古八多
 〇原太彦四房
 〇丘秀小六

眠獅選卷之二

の五



明神選集

卷下

子孝親又セ
小六三宮と云ふ
之役より法勤
未だ
二代目沢村平右
馬一と云ふ

名古屋へりてお髪を及總香の土佐の又平
の此役より土地城嶽を二役せしむる遠山
切小石橋をくことのお交すゆりて甘旨のを
方の勤のこ●日六五日は大坂西竹本をよて
少下八日花を本を勤間のおよ双崎く出て
ぬを交す五席とておてその二役始後のお
らしとまふらゆらぬ若五席のよづよと
ははくははの徳判▲白の六上上書とてりて
大八角も同じ狂言出たれとてども又古さん
しおおとを少ぬのたをいれては後にも

入かろ●日七寅冬ハ末尾上乗助を八役て
十冬よりえとてよく親又セハ石橋考一の
不化よく▲上上吉と成●日八卯冬末三株徳
次席をよそのよ女形の三者とゆれく親又セ
けいせい静系を後死香の六カ二役演のその
ははくよく▲上上吉と成はは相正を勤め
次近江原氏のみあう役の徳判大ふく二やと
四斗を演のよづよより秋おあささ席の四
目不破伴左衛門役を考ぬがくセ●日九辰冬
日末まで嵐山十席座勤親又セハ意子お組うて

坂田半五席
亥卯年

民謡選卷之下

〇六



明神選集

巻下

市野川彦四郎
彦三郎と改京出

三吉は傘さしけちる出陣より始發
 二の勢り櫻床殿は極戸と正妙妹おすぐりその
 城坂正妙小教され大切の石橋をつとめ
 改牙小使くききり▲上吉思吉とありて
 糸立おとかりりりあきけ狂きみどき妻子役の
 候那がうま子ま似ぬ一流の又ふあるとく
 眼をたぬとあやうひなりて其女非んも半
 又ハ殊脊山のさきかきてもきく●安永二匹冬ハ
 大坂小川吉彦座ハ四度方教え七白拍子
 離勢そのうつが橋の秘言古の仕おきく
 勅使での外題あーのりどるの扱菱相
 巫と橋丸女房八重の二役も大体二の勢りハ
 小栗宗丹の要悪出来ハ大体をうら女形
 うら勅める字悪ゆへにこどもて又さめりての
 活利きくきく少成てしと女一甲斐かへと術
 之少程不成くまき次ハ雷電源八の役替そ
 角力これ海小引繕て之役の仕おのまかめ
 次ハ大塔宮の二役目よて花園役丈小使は
 うら川うら女形うらもいん毛次小切狂
 言はお龜の役小川英子とを謝とかりく

○赤坂大五郎
○古来必

眠獅選 巻下

のり



眠獅選 卷之二

登の女夫とて笑つて中島も移り〜次小
 雲を獲るまで大それた役哉出次小及魏香を
 又平女房お吉とけのせきを山の二役切小石橋と
 出世お悦多〜●同日午冬八中まで嵐松次房
 へ入す〜顔見え白菊役梅幸同日不
 して間の物忠臣義とて八早登勤平役三々女
 六つめともいふあやうい沙汰も勝色〜方まで
 なる〜二役天川屋女房お雪大少酒利
 しく二の移り梅幸油と〜狂言とて八家
 陸前（うづま）の役次は近江源氏とて八字治の方と

○梅幸初一年
 ○由良之助梅幸
 ○天川お梅幸

母みめ〜と四斗を湯女房との二役とも甚沙
 法よくまう巖柳（いづな）とて間割角お島つ女房
 おら〜と格別とて長女一風お常（ねづ）と女仕打と
 大小交〜と葎（わづら）とて長女五九女房ちよの役も
 しく●同日冬末夏川山吾の〜とて顔見えハ
 狂女さ〜と出揃先長女七五の年
 親小おの住〜と似〜又自分の持家
 あり〜お母〜と似〜又自分の持家
 唱種とて八大体二の替りけのせの鐘が唱渡小
 持多小女房とて与次と副女房とて〜後城の

○葎相と梅幸
 ○本と丸梅幸
 ○白大夫歌七

眠獅選 卷之二



聊齋志異卷之二

夫小公遠征しての勢もさきまのどくなる仕事
よく二役まのうほあうてををき傳出の足へ
よくけい色も若女形大立ものなごう三役狂
言の次弟小舟づりなる致えどして外系の
秋を女形の名跡うとくく九月二日え後
ををうとく

とれしぬ系秋の馬んくうと一の谷徳若と
岡部玄孫たの二役もよあううとせしと
後づ人のと切小致おち二世一代とて山姥の
役もく快幸丸とをうて秋子の情をのりハ又
遠風ももやううとををでもられ甘みろ六
大坂之柝松と無産之約束出まて由賜を
とく二浦大助の三石切梶原仕事ハ三流小
く足ふくも有まうと然るなよか毎と下
あうとくとうぞ昔話のゆめをえさひおとの
ういさ

あまの梅咲やな多成なへしより全
よの柳おをも出しりて大坂その秋えせハ
氏田家臣鉄孫三郎を供者小ありとくの

民師選卷之下

〇九



眠獅選 卷之二

勤平嵐吉々

角の座ハ
双峰く出さ

東の座も
差松二十布そ
忠臣義出
由良もサ勒

糸古深ふめさうし狂言先仕おふちふい
か今少し嘉うが落付のぬかとも云れ決
るのあ忠臣義出大星由良と勅と勤平が
母を指あそて捨別其場の熱つよく由良
と勅ハ梅香で足て服のるもなくしくもこの
時那のうもけ九月は立役と成ての十二月の夜
え服小まごころ月三夜して是程の仕おハ兼
て立役由良志一深き故手持の勢うハそ
よの語しとも参り色位もやんり女形の傍そ
▲上上吉二の勢う花園太仁ハ女しはけう

かこのう次よ思能狂きめて獄門のなまき場
学話歌を琢りうて收び只勢を而己悔む
を切り尻うけの仕頼サでも嬌しう世しと
次は園七九房多謝の役四ツ目屋々居場者
奏さんうと素廉さうし七ツ目男殺し小
娘く裸婦をえそや夫を先收ぶ嘉の娘ハ
しさ廿夏救小六と浪念の一世一代と山姥
そ快幸丸を佐とめまより晁のるま多下り
をさあゆりしおあま甲芝居とめ有て座本
もわりのう嵐七さう屋そそ急女房深手綱

民而選 卷之二



一、路者坂左内竹村定く進お乳の人のを井井と
 ひぬうの八流の四役は大小我をわくせその大入
 名其事とちの移りめ女形ハ持余のうり
 たるら次よりそとて解さる士は女大入收バヤ
 来より十月八日を初日としてはる色の移成
 出して喜屋次房右衛門後正月の物を大のふ
 非人の坊左移もいひども甚去のせうふより
 款討小出るすそでのぬれ移よく仕歩子（此）密結
 つやくと大評判ををけ狂言の初番番
 ●同五申冬より角小川座へ移り教尼世と

中の座
 伊賀越えて
 唐木政を無役
 由男大あり
 早移り興実評判
 〇次、先代殺
 古舎柳を政岡
 女形を成とん

伊勢満老の輝く和うと次間のお影る雪
 お徳は秋月大膳ハお徳とハおひの外ま程も
 云つて有しう二役地元の五平次の世話法
 よく二の移り困る万葉よそも堂ふよと石
 不動も大伴桃井市正ハ何うと次小天満ハ茶
 種供もそ左大長時平のう美悪もそいとの外
 我おくを大ふ交を丸房さそ今小時平は
 ちくと狂きお名物と成二役伯母受茶の役又
 後定のうらよその出来お土師のうあとの後
 合幕おと収をを列して時平ハ移列の法は

民師選巻之二

〇十一



目録
身御遺書

ととまひれ大ふ入をり次はししの狂系握
のちき糸の少敷ハ又去の獄門ハ又格別の
出来益終りハ縞紀貞婦鏡小奴ワび助の役
して新園寺の仕事ゆく後出せして梅香と
園吉の隣合大より九月より千本搦りて
後海屋新平と執屋孫左衛門佐及忠信狐と
の四役孫左衛門ハ始ての我仁と終りてハ紀盛
忠信大休と狐忠信先出惣二重と喜海巻の
甘りともめつくりハり終て大よき事ゆく分
て園吉を静きて道り陣の外浮刺りて

中ノ座ニ至而士
あぶらこせや
二の替りそしも
より小栗宗丹
物さなく續て
出
寺が七戌
二戌目はき終

す川ありと汝侍強くをり●日七戌の冬も
日産して半迄の款又セ亥の事と赤穂塩竈
より高の所連の孫柳より塩次を科小島守
大よきと終り又も格別よあつて汝小大星
力弱そのお姫よりえ抜しての仕事おあはせ
取ハて又セ次ふる孫孫あつてのうまのおや
大休あつて二役ハ別してあつてハり汝侍より
△上上言をり終て金門五山相の石川五
右衛門と又格別の大出来事ハ知るおあはれども
五右衛門の狂言事と中ふ娘中終とも此仕事

眠獅選卷之下

〇七二



をききうとして服をききうの及むうけはききうり
 棹歌本津川八景は勘助の狂もほろく次ふ
 和田合戦女番鶴は板額いんがくの役梅幸あさうお守市
 こそ二人とも持合くゆはうくそ又大小出う一切
 ぼんれの錦こそ其及次第右邊の續て正月の
 油は始よ十さるまより五斤金小紫の平ひらと
 なるをそ阿中り仕歩水臭くさるるとく面白う
 ●同八亥年も同辰年と▲大上吉と成教又セ
 梶原平次こそ仕立もまよそ福小狂公れての
 不化の甚ど又事辨文立役小たうくくより

十さるより
 五斤より
 同辰

○妻子一座

始その扇はも寄藤ふじ故のゆえそ一入二の格り
 石井城守名和張は浪人を席をたふと成儀なりぎ身
 こそ後將門の縁故と又殿公されまはむ人を
 孫一初後一二役良助こそ末は裸はだかそ冠かんむり成
 玉たまをいかにゆき入るといふも入も得り
 すぐまぬしてはよまき子葛のまをききうそ小
 あいらく石川恵右衛門大膳こそ不烟はら
 こそを笑ふそ二儀芦屋お監はらほらほら
 こそよく二つめ小袖お相ひ身形みかたまよそそ
 こそとまゐる不化のまより切り小東艦の三拍

民市選集 下

○大辰内笑雀
○女房柳 皇子
○ひやお三子

女永九子
山吉三宿終
二并大五席終

眠獅選考
三

比奈ハ又えううく大不任判をとりけきを
系越坊来極やう賜をくして土佐又平よ
あつとどの雙もあひのかうくもあう仕箇大方
大切大津法抜出―不化辰の志やうげ
振袖その隣不報とのひあうれ産取う
較通―やでも服を多うくそをんよく
はらめてのとき系・日九子年系深松七三
親兄也吉例とて後孫うその役者系不
寺強正の志やうあう仕打奥八物種より取
はとあう通成寺のま秘びをうり二の務り

江戸の紋を

回小政今の

三井塚町
足身ものり
そひーなり

金門五山桐五志あつての大あうりいやく大
之者小あを交せられい自甚系はね丸と覺
ま稀世塔役あう二役ともふあう―
け夏秋の比よりいそ分相従ふあうとども出
まがくあう親兄せをのりの約束あま
○高冬十月より出ま有廿六日系込十二月朔
うう本挽町表田をくあう丁七唱ま後孫
の狂まの通りも見あうく只まのなうぬのぬ
はあうと地小合あうの合うぬのまま理をぬ
江戸役者とあうも其あまの改ま女房

民市選考之下

〇廿四





耶雅遺事

の一平と重の井の二役の事おぼやうとこれ
まで手練あり一女形風はゆふなるといふ
我をおろせと只毎日をさかせんせんぐも
とらうとそ尾よく一極の場系故教見
せらるるなりと○日十五酉月より東山下
出動あり二の勢りいふ堂を化と三浦荒
の二役大徳の候そ三の勢り赤城塩竈そ
師直と力強と天河屋の二役師直ハ別と
まうと次ふ非人敵討おぼやうなり月場の
汝法のとらうと大木候と續ての大入異中ハ

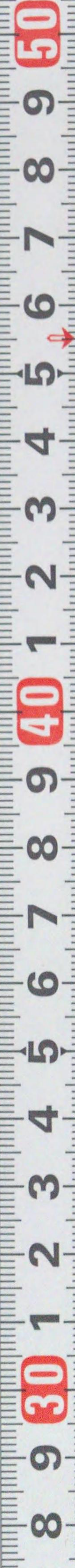
天明元也
小川吉吉終ル
大谷友吉終ル
三井他入吉と改
○由良と梅幸

紀州の方より信振有りて越えを狂ふと
福ありとそ信助とそ田とそを忠つと殺して
女房お才の供して敵討よとらうとそとそ
は仇入らるるのなかり殺しまよりのまかり
ての事もの隠回すよ敵のま合も皆逸風と
のたこれ位おと収む○天明二寅も同日を
教又そと茶種信も大坂小かつと二役とも不
活利おとすく仕立て二の勢り和田大八とそ
より忠臣花とそ師直と中良と勅定九郎ハ
今吹下仕立もあらんともいふ中良とそ勅も

天明二寅
中山元二世二代
幼六のあり
坂本三海あり終
二代目坂田半終

民部選定

〇十五



○近身 梅幸
 ○重忠 梅幸
 ○源太 末芝
 ○千冬 其答
 ○東の座 八白老
 ○西の座 甚吉
 ○長吉 八白老
 ○老吉 俵吉
 ○お吉 富吉

○依米子 梅幸

天明三卯
 尾上勇五席終
 中山来助終
 中山彩九席終
 嵐文五席終
 市の川左四席終

あまのよしとてハと大休候し候師直ハ遠小中と
 ちりとのは流経くちり何れ松名處ハ大体を
 握系平次ハ其布をのめは仕立と違つて大志
 の一喜息子の仕立を流させ双燈くまを流れ弱
 長吉さんぐつと角力もちりめをりもて角
 力九てかまてま拵あまこれど入切ひかく跡念東鑑朝
 比宗信條物村は侍たささう千両職の千羽川さきま
 狂も妹脊山の深さを大よまのししと狂云の福
 信など存の外を拵候く何となくくえぞろく
 近江源氏その依も本四席なる和用を糸と母と
 三役とも不汝はよくぶしと勢ひ月とみずして
 〇日三卯自も系中山来助座敷又せ山岡真を
 してあまお對主座基ももま更とくも切より二役
 角田川の退利なるも大体形づつ彼勢ひつづく
 けはまふとのなく二の勢り栗の唱後不家老山原
 織アと成く後幻樹とて若殺一後安田山威が
 はりりことふゆり後綱を流さるは二役も勢り
 まてゑ重忠洞八まの流れ初のみ藉又とちりて
 玉兔来以まふく思ひあての仕立を高く
 より▲極上上吉と成くさる回とのみ海より

天明三卯 卷之下

〇廿六



野狐遺考

け秋大坂角の庄助よりく鬼二法眼三畧
奏も鬼も凡甚る人仕事も教なく次鬼二
役也しるふ合つぬとどども又そ程よき人ハ
なつとも只四重目大系ハ四の口ざつとく
よく切り申し不化あつて高ヶ由を殺してうも
よく始終嫩しゆら次は二十石を川浦踏見
と神及源八の二役奥山との出合不疎しと
まつれても苦もなうぬ持あの仕歩次千本
標の通りと四目狐の場とそ及び廿三との
出合わつしふわらぬ候とそ多々ゆつ●日四辰

○芙蓉○虎脊
○里虹 同座

オウら四系は芝居なく北路下木は芝居こそ鬼
一と彼二役こそ少冊芝居も移入し夏あ代
未園とすてもとられし大入四月より名古屋
仍く赤城塩竈と大入との波清有うけ
五月より勢州業名移へる本橋を去し是も
業名も移りしと大入●日五己正月の大坂
也る松崎羽地芝居坂東名言を座より急女房
條分を認めて江戸を島崎高坂を内村貞三進
留掛村八巻とお乳人重の井五役とも大狂劇と
此一扱は候をせとく大よ交うくならて次罪人

民師選卷之十

〇十七



○義人三才
○三郎 羽七
○花屋 西多

敬討あつく次郎右衛門を高次不束禮の初比
 志を遂へ又桂川の志名集の孫を布男とかり
 大切は深き砂の雨他子田舎始梳久八取不た
 工丈仕置るよしとて安らふハ又志をくく次
 土佐佐のぬたよ高次よ面妻女まより融大匠
 しくは及未ハ服^{えが}て梶原源左で禮はあその
 雨他路くく大よ高てそ危よくあへゆり
 ところ末をも甘らありしは流のこまは初
 流のゆり少一芝居よ故障有りくあく休
 まより大塔を廻禮を志して志礼備持

○梅幸道長とく
○由良家笑雀勤
○師直 七才
天明六年
松本幸四郎
岩井半四郎
大坂上ル
錦川凌元服
新四郎成
嵐小六 終
中村屋十席 終

差四郎よそ氏男美集よそ大不富二の口無
 こそ左敷の場を地の特仕密然、手まぐりて
 二の切多段の場とややくいどもあきよ取
 二のりうもあぶこの強、はよく腹切をた
 こそさせ次よ金屋金五郎狂言よ伊辰重
 こそあも何より高秋忠良花出て加古川本
 寺園よ志集の石巻右るよ並天何屋長平
 四役大よは流る●日六年自ハ子息嵐秀
 をなかとて教えせ北條時和紀ハ三浦源正
 役あひの外面白くは切ハ七室深き砂の雨他

天明六年
松本幸四郎
岩井半四郎
大坂上ル
錦川凌元服
新四郎成
嵐小六 終
中村屋十席 終



眠獅選卷之十

○弓削大助 形七
○二階堂 俊孝
○系田之助 来助
○ワノ之 小孝
○菱相五山下百尾

○三原土波屋人
二役とも幸四布

○幸お 幸四布
○幸き 幸後八布

○辰三 幸四布
是切之 幸後八布

小奴の仕立方小文く有しよへのひたぐりく
跡急次 菱原小見嘉と松正社二役お小形くひを伴う
とよりり ▲至極上上吉とよりりて大坂堀江市の
側りて正月より大境文旭鑑と出し無後をたの
役二場とも大御前小見お子肝と決さ七四段目殿
のきあまそ其言との雨化少し勿論御座切万才
も狐波はよく次秋系桂院にて日本結お急のり
切と宿屋場も大体御うくまよりりはごきの務と
まき及二場ともかぐりばはよくまよりり石坂堀へ
移りてとも金ヶ淵の五右衛門大あり固性兼合

○稀川大吉 終九
○二代目 稀川八巻 終
○中村仲茶 終
○角の定中 終

我和後内の役二の口八巻の布子故ちと和後内め
くぬともども貝屋の和とハ移別虎の場
三の口切とも吉風とよりり仕おと候とく次小
博多織とて船改小平次由男役も大体の御とて
後山姥と出し子息秀と御使重丸とての仕打
は御取小六隠居して法名是公といひも八月廿
三日小行年七十七歳と目出度も菱原の及
送られし其孝の心をりかともまよりり十月より
金昆屋へよりり ●日七未冬坂東忠五郎座へ出
親父で八巻地金後次の和と梅幸の海と取

民市撰卷之十

〇十九



乃のお伊弉諾狂云希々本政志出の役陰の修授も
 由男流なり流一流ある仕扱は我を扱はせ治ふ
 大切真顯記は序まは来久吉の役附く外はよ
 くは捌さたまの仕やうぶんぐうく一核別く毛を
 村去助役を志致の所他はるはま来れも今で
 何ぞもたのやうももつてう一味舟母もよくあれ
 ども菜種床供の是嘉徳もをなく是二役もふ
 何よく切は用明天皇の権入不他く後傾城
 も是能夏ハ長お三田尻とやんへわりまう下の
 園の方をとりを後より系於芝居へ出で苗

も叶と改真顯記をよめて一味齋の役と四役
 こそ大ふ人を死せ地のめりくを引きて我を
 扱はせ附文切の角力、園五席との裸はらの足り
 さはよ釜が園の石川五右衛門こそ又は六入めり
 一とさ程の繁昌こそ大切用明天皇権入の所
 化●日八申年布衣死を林くは是座くは款
 又は堀川夜討狂くして各々の役續て決法よ
 く切はせま来芝三人為狐の正化ハ女一のあ
 らひをうり日師走又も堀江市の例へ元一を下り
 こそ堀川夜討の各々をく大坂こそその活利を

二代目
 中村十左衛門
 嵐七五右衛門

眠獅選 卷之六



○犬清 三女房
 ○千里 八百菟
 ○因形 田左房
 ○久吉 後友の

○狩野豊 後友の
 ○三市 後友の
 ○後市川 後友の
 ○出物 後友の
 ○後をつとむ

本下薩後回合戦を出し大々名譽の者とも
 つし是末代の役を片岡(譲)りて後友は三城
 つとめ竹中友三と石川五右衛門の二役継
 古今の出来次第は鹿井は梅川は其言を承
 眠継つとめされども後友は五右衛門に
 務を譲りし出し別喜後友房を承つてつとめ
 任利は度ハ元祿後別後房を承つて後友は
 役をせしとく及び其の死のつとめは
 今尚の役末芝二人の也やと云城ありハ
 ●旧は九月より大坂をめぐりて一世一代を勤後と

中も取小六五十は成とてバ引テよそのを承せ
 めては三都の一ツなりとも其は情をもちり度
 とてより一ツもつとめ退屈とて先世の
 なく久米仙人の四ツ目五ツ目も其役大伴能
 子依のつとめなるを承つてつとめ五ツ目
 久米仙人もつとめ其の役つとめ其の流衣を
 淋しとてつとめ古法を承つてつとめ一処
 を承つてつとめせんといれつとめ其の命を
 死給めを承つてつとめつとめあつとめしつとめ
 九月九日より右一世一代を承板出し本下

眠獅選 卷之六

二二二



○大清いろは
○千里いろは
○因路必後帝
○久吉他系

○あひのいろは
○留原系末助
○日女房いろは

目録 卷之二
三十一
後狭間合戦大切は山伏撰待を出入り来
他の後成程ざんぐりとしてえりて改は竹井官
を處へ義基へ出初めてよろの出来としてえり
うしてを地つよく後大徳小をうしてのを
名の者程骨多まらうと軍師の格好うとを
原の竹若よりうとて後者もあうとを
云れは改は石川五右衛門をえりてうとを
親子の情をこめて位安の海より入るは殿の
切はたなくもなく切の両化すは後返の老母乃
彼うとく先妻麗うとくまうり強持の扇の自
も中く西化すといふはなくも我をえりて
合うとくの事うとてはしうとては古今
未多者の後者なりとも云はまうり口の物と
ぬりて娘景清の三則景清の役を又能はは
の出舞のえりて切までも彼をえりては
こそ切は陸入をせりて目あうとて景の義
中の二存より角の座は雅時のお義を卷乃
つとめをえりて一世一代も物うとて中のを
又え狼の義基初めより一存の義基を
中の座の教えせれ助うとて出れりての二座

眠獅選 卷之下

〇二十四



目録

の狂ふは接なくけいせい見例を狂ふは守
 是と先自天明二寅山月系を勤れ
 狂ふ其時の相手をなまばらしく沢村其谷を
 下一を居るははむ眠穢捨るの役を
 ぐ個へ志づめよとあはれ石地系を脊肩が
 ら個よりと幕足よりすごひとの狂ふ
 後よやまごこの中將とありやうふある場の
 不骨拙さりと六家廉を仕えよと仕事も先
 とうり八たるは又坊り大切小化教六歌仙
 とて不化の小町を以て後落さる子を歌うして

中の座へ
 市川八百元
 五三の辰彦
 江戸より
 大坂より
 小代より
 大あり

○小栗町目上

五人のほふかりく始信正通徳の時代乃徳衣
 次は文彦康秀の女衣その意のつらさなり
 将くして元次は業平小町二人の不化の初
 と八幡が州ととるるつなをぬきよふ坊
 多くは不本撰法師のまき衣の不化のまき
 持と海のかつめ身の不化の将く大い小
 肝とははる勢はよ大伴まきよとて実悪の
 逸風はまはたのまきがう都えて狂ふの仕事も
 将くは酒田島友才元大徳利のまきを初め
 小本を世あはれはびりといふぬ人もなく良貞



連中船の足送り小波ひさるうまをん

夫雖助惟名ハ右法帝とそ寛元元年母父
分く東衣ハ仍其年ハ米吉相志父小云然志
付岩法帝生之只をく名ハ離文と云ふ父
方小云然ハ流名くなく和意意ハ傳ハるそ
去こそ然くハのハ大區多しハ本按町ハ勤之堤町
そ今ハ元正を云叶の定ハ回ハたけハる
楚相志と名取ハ中を元ハ茶孝ハ率ハ海老
舞舞ハるそハる相志の守相ハるそハる
眠獅選巻下終

むうーとて多舞妓彼者乃中一
坂田大和山をやつ一歌の岡山と唱え
京を去ハハ歌ハ実るハ師ハ名をゆハる
十年ハ中を去るハ相と作りハる川ハ
空思乃名人片ハ名を歌ハく此上ハ今ハ
去たハるそハるハるハるハるハるハる
福車形の道人小那川ハるハるハるハる
ハるハるハるハるハるハるハるハるハる
ハるハるハるハるハるハるハるハるハる
名人とハるハるハるハるハるハるハるハる

眠獅選巻下終

（下） 眠獅選

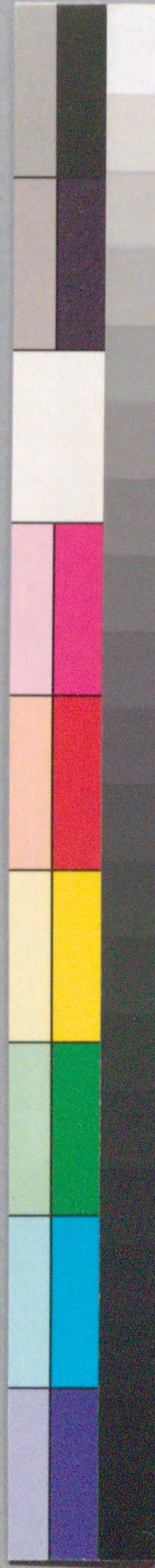
書鋪

八文子
八文子板

寛政二年庚戌正月

一

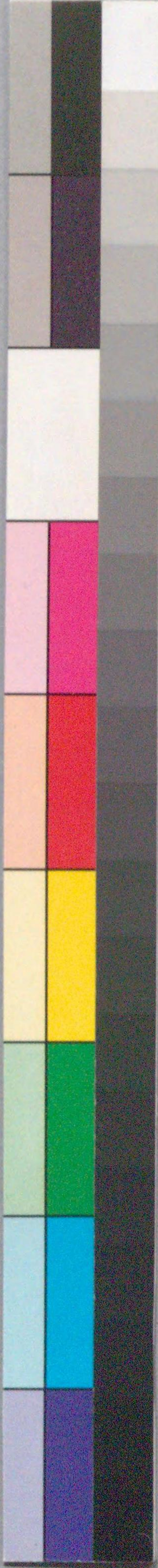
目録
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

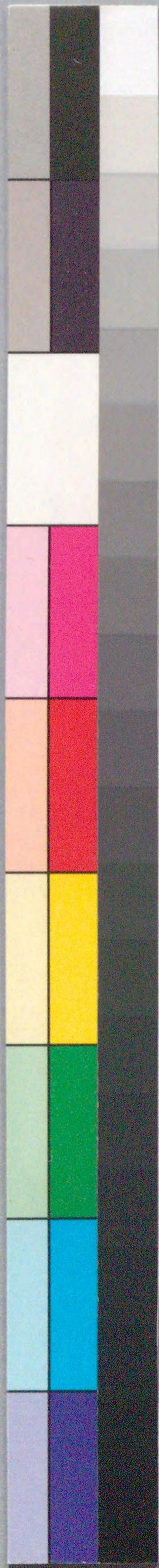


208
1
126

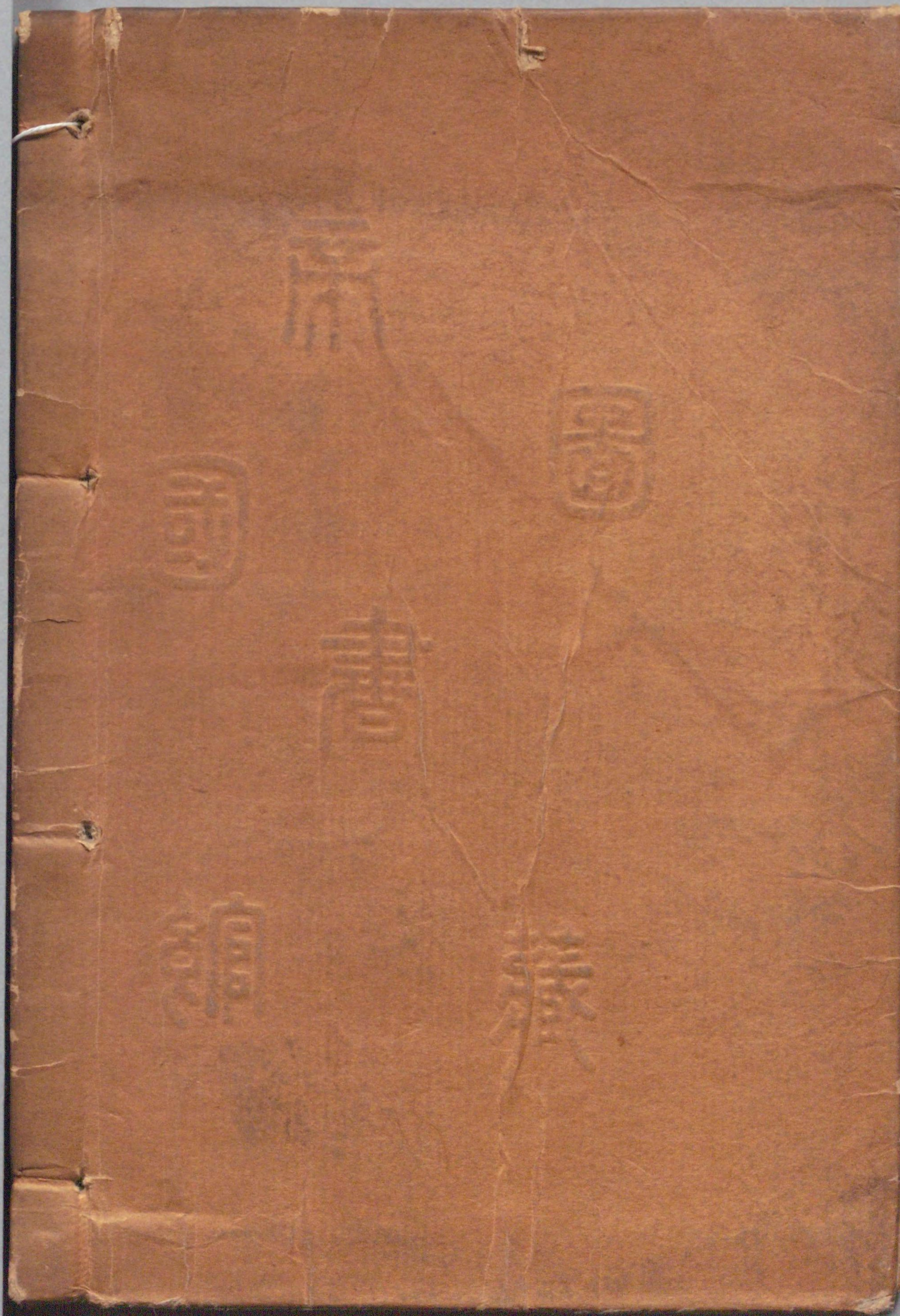
此
巻

眠獅選 2巻





国立国会図書館 眠獅選 2巻 208-126



ガラス使用

